

Monthly Report

柴田町制施行60周年記念「2016東北こども博」を開催 ～過去最大の19100人が来場～



リオ五輪柔道女子70kg級金メダリスト田知本選手（右）

10月9日（日）・10日（月・祝）の2日間、柴田町制施行60周年記念「2016東北こども博」（主催：東北こども博実行委員会、後援：文部科学省／宮城県など）が本学を会場として開催され、過去最高の約19,100人（昨年は17,700人）の方々がお来場下さいました。

「東北こども博」は、2011年3月11日に発生した東日本大震災の復興支援の一環として「被災地の子どもたちに元気を」を合言葉に始まり、今回で6回目の開催となりました。今年も、子どもたちに、遊んで、からだを動かし、元気になってもらおうと全国の玩具メーカーや地元企業が協賛くださいました。ウルトラマンオーブやシルバニアファミリーなどの人気キャラクターによるステージショー、サッカーや野球などの競技に挑戦できる「ちびっこスポーツ広場」、グルメ屋台などが並ぶ「お祭り広場」や「復興市場」（女川のホタテ焼き・亘理のいち氷などが出店）など多彩な催しが行なわれ、各会場では大人も子どもも夢中になって楽しんでいました。

また、会場内には本学にある5つの学科の特色を生かした体験イベント等も行われ、そのうち、運動栄養学科のブースでパン作りを体験した小学生は「おいしそうなパンを楽しく作ることができました。おうちに帰ってからもう一度作りたと思います。」と話してくれました。

その他にも、9日にはソチ五輪ボブスレー日本代表の黒岩俊喜選手（大学院1年）とユース五輪スケルトン日本代表の郷内翔選手（岩沼中学校3年）によるトークショーが、10日にはリオ五輪柔道女子70kg級金メダリストの田知本遥選手（ALSOK）と南條充寿教授、柔道部女子監督の南條和恵さんによるトークショーも行われ、多くの来場者がそれぞれのお話に耳を傾けていました。

皆様のお来場、誠にありがとうございました。



過去最大の19,100人が来場

〈目次〉

「2016東北こども博」過去最大の19100人が来場	1
内閣府主催「地域コアリーダープログラム（英国研修）」参加報告	2
健康づくりサポーター認定証授与式 ほか	3
山下泰裕全日本柔道連盟副会長 本学を表敬訪問 ほか	4
南條充寿教授によるリオ五輪柔道競技報告会	5
学生の活躍	6
2016年4月「子ども運動教育学科」が誕生	7

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報室までご一報ください。

仙台大学 広報室

直通 0224 - 55 - 1802

E-Mail kouhou@sendai-u.ac.jp

内閣府主催「地域コアリーダープログラム(英国研修)」参加報告



高齢者が集う作業所で現地の高齢者と

内閣府では、国際交流事業の一環として、地域課題対応人材育成事業「地域コアリーダープログラム」を実施しています。この事業は、日本の各地で高齢者関連、障害者関連及び青少年関連の課題解決に向けた取組に携わる日本青年を先進事例のある外国への派遣、外国において同様の課題解決に取り組む青年の招へいを行い、地域において国際的視野をもち、地域の活性化に貢献できる人材を育成することを目的としています。私は今回、高齢者分野の英国派遣団として派遣されました。

6月末に行われた事前研修から派遣までの3か月半、他のメンバーと地域での高齢者を取り巻く課題について意見を交わしてきました。メンバーは日々、全国各地、様々な専門分野で活動していますが、抱えている課題には共通するものが多く挙がりました。日本の制度だけではなく、英国のチャリティ文化や国に存在感を示すボランティアセクター等の取組についても事前に学習しながらテーマを設定し、研修に臨みました。

出発前2日間の研修を経て、10月9日(日)～18日(火)の10日間の日程で、英国(ロンドン、ブライトン)での研修に参加しました。現地では、在英日本大使館、英国内閣府(市民社会庁、保健省、労働年金省)、ボランティアセクターをまとめる中間支援団体での講義や、現場のケアホームの視察などを通して、英国の高齢者を取り巻く福祉制度や現状を学ぶことができました。日本は政府が制度をしっかりと固めてから国民に浸透させていき、現場はそのシステムの中でサービスを提供していくのが一般的です。英国政府は必要最低限の制度を策定し、現場が運用していく中で、必要だと感じたことを予算内で自由にサービスを提供しています。場合によっては、政府に意見を上げ、政策の提言をするほど、政府と民間団体が対等な立場で現場の声を届ける仕組みが確立されていました。

今回の研修を通して、日本の民生委員制度や自治会などの既存のものを掘り起こし、発展させていくことが重要であると再認識しました。帰国後に東京で行われた報告会では、その点を重視して発表しました。当日は、阿部学長にも足を運んでいただき、研修で得たことについて記憶が新鮮なうちにご報告することができました。

英国でもゆるやかに高齢化が進行しており、高齢者の孤立や認知症患者の増加等、日本と同じ問題も抱えています。また、高齢者がいつまでも健康に過ごせるよう、介護予防の取組も重要視されました。世界的にも“高齢者の健康づくり”は重要な視点であり、これまで本学が取組んできた地域を巻き込んだ高齢者の健康づくりは非常に重要です。今後も地域に根差しながら更に発展させ、世界にも発信できるよう活動していこうと決意した研修となりました。



英国派遣団 ※前段中央は内閣府国際交流室長

【報告：新助手 齋藤まり】

平成28年度9月期卒業式・学位記授与式を挙



10月4日(火) A棟大会議室を会場に、平成28年度9月期卒業証書・学位記授与式が挙行され、3名の卒業生が本学での所定の課程を修め、新たに本学から旅立ちました。

式の中で阿部芳吉学長は「これまでの大学生活の中で得た経験は必ず役立つときが来る。社会人としても立派に成長してほしい。」と3名の卒業生に励ましの言葉を送りました。

なお、式にはクラス担任や事務職員も参加し、3名の旅立ちを祝福しました。

健康づくり運動サポーター 認定証書授与式を開催



認定証授与式後の記念撮影

10月25日（火）に健康づくり運動サポーター（以下、健サポ）の認定証書授与式を開催しました。今回は平成28年度前期の資格認定評価会で認定された初級6名に対して、認定証書が授与されました。健サポは本学独自の認定資格であり、これまで延べ474名が本資格を取得しています。

今回、初級を取得した笠原茉友子さん（健康福祉学科4年）は「4年生での資格取得となったため、卒業まで時間は残りわずかですが、今後も地域の教室に積極的に参加していきたいです。」とコメントしました。取得者の中には、後期から中級養成講座を受講している学生もおり、取得後もスキルアップを目指して取り組んでいます。

資格取得には現場実習3回以上の参加が必要であり、地域の健康教室が実習の場となります。地域の方々と交流の中で、学生たちは自らコミュニケーション力や指導力、ホスピタリティを身につけていきます。地域の皆さんにとっては健康に関する知識を得ることができ、学生たちにとっては自らのスキルアップにつながる、お互いにWin-Winの関係が構築されていることもこの健サポ事業の特徴です。

今後も多くの健サポ資格者を輩出し、学生たちが実践力を身に付けて社会で即戦力として活躍できるよう尽力していきたいです。

【報告：新助手 齋藤まり】

第3回運動栄養サポーター 認定証書授与式を開催

10月25日（火）、本学管理研究棟2階大会議室において、第3回目となる本学運動栄養学科生の「運動栄養サポーター認定証書授与式」が行われました。

今回は運動栄養サポーターとして、基礎取得者10名、初級取得者1名、中級取得者1名の計12名が認定されました。

授与式には運動栄養学科2年の佐々木康介さん、1年の菊地麻海さんが出席し、阿部学長より認定証が手渡されました。

阿部学長からは、「さらなる上の階級の取得を目指すとともに、身体への栄養だけではなく、心にも栄養も与えられるよう、選手に寄り添った支援を行ってください。」と学生に激励の言葉を述べられました。

授与式終了後、佐々木さんは「今回の運動栄養サポーター基礎の取得を自信に変え、次の階級取得に向けて、知識や実践的な経験を身に付けていきたいです。栄養サポート活動の質を高めるためにも、上のレベルを目指しながら、日々学習していきたいです。」と固い決意を表明してくれました。



認定証授与式後の記念撮影

【報告：新助手 菊地 遥】

留学生Welcome Partyを開催



台東大学からの留学生と陳先生（左）

10月12日（水）、本学との国際交流協定校である台湾の台東大学からの留学生を迎える「Welcome Party」が国際交流同好会の企画のもと行われました。昼休みの短い時間でしたが学生同士が積極的に交流し、有意義なパーティーになりました。

パーティーの中では留学生の皆さんに自己紹介をしていただきましたが、流ちょうな日本語で自分のことを語る姿には驚かされました。その後の会食でも言葉の壁を感じさせないほどに日本人学生との会話を弾ませていました。

今後の日本での生活が彼らにとって貴重な経験となり、今回のパーティーをきっかけに学内で多くの交流ができることを願います。

【報告：国際交流同好会 体育学科2年 安田真一】

山下泰裕全日本柔道連盟副会長が表敬訪問



本学を表敬訪問された山下全柔連副会長

10月11日（火）、全日本柔道連盟副会長・強化委員長であり東海大学副学長の山下泰裕氏が仙台大学を表敬訪問されました。

山下副会長は学長室にいらっしやると、2013年3月から2016年9月末まで全日本柔道女子監督を務めた、仙台大学南條充寿教授の功績に対し「全日本柔道の監督という重責を引き受け、全うするためには、所属先の理解と支援が欠かせません。南條先生より、仙台大学が監督就任に対して即決で快諾し全面的な支援をしてくださったと聞き、心よりお礼申し上げます。リオ五輪では南條先生から、何があっても己を信じ、選手を信じるという強い気迫を感じ、あのような好成績を残すことができました。

2020東京オリンピックに向けておかげさまで若い選

手が育ってきています。」と感謝の言葉が述べられました。

南條教授は「2013年3月16日、故斎藤先生の電話で全日本柔道女子監督就任の打診があった翌日に、当時、理事長兼学長だった朴澤理事長・学事顧問にご相談申し上げたところ、その場で思い切ってやって来いと言っただけ、本当にありがたかったです。監督という責務がいかに大変なものか、なってみてはじめて痛感しました。得難い貴重な経験です」とこの3年間を振り返りました。

朴澤理事長・学事顧問が「1964年東京オリンピックで柔道が正式競技となったことを考えると、2020東京開催は原点に回帰し次の新たなスタートとなるものでもあり、柔道競技がオリンピックで日本のスポーツの象徴的な位置づけとなるような今後の4年間であって欲しいと考えており、これからも南條先生の持っている力をそのために活用ください」と話されると、山下副会長は「南條先生の経験は、今後も日本の柔道界のために活用させて頂きたいと考えており、同時に、仙台大学での学生指導や先生ご自身の学究のためにも、活かしていただきたいです」と応えていらっしやいました。

阿部芳吉学長が「この船岡の地で、全日本の合宿などを行っていただけませんか？」と伝えると、山下副会長は「今朝、散歩した船岡城址公園あたりもとても良い場所ですね」と笑顔でおっしゃるなど、終始和やかなご訪問となりました。

平成28年度前期海外留学研修報告会

10月18日（火）国際交流センター主催の海外留学研修報告会がラーニングコモンズ（LC）棟で行われました。

今年度より新たに加わった「韓国伝統武道・警護・文化研修プログラム」をはじめとする海外武道実習2つを含む、計5つの留学プログラムに30名の学生が参加しました。

学生は、海外から日本を見ることで日本の良さを改めて実感したり、日本にはないその国特有の習慣・文化に触れたりすることで、今まで当たり前だと思っていたことが海外では通用しないのだということを知ったようでした。

海外留学研修に参加した学生からは、「様々な価値観に触れ、視野が広がった」という声が多く聞かれました。まさに「百聞は一見に如かず」であるということを実感しました。

会場には30名を超える教職員のほか、今後留学を考えている学生の姿も見られ、報告者へ質問をするなど活発な報告会となりました。



フィンランドでの留学の様子を報告する学生

【報告：事業戦略室 鈴木美生】

南條充寿教授によるリオ五輪柔道競技報告会を開催



南條教授に報告に耳を傾ける参加者

10月22日（土）、学生食堂「なちゅら」を会場に、南條充寿教授によるリオデジャネイロオリンピック柔道競技報告会が開催されました。

報告会には朴澤理事長・学事顧問、阿部芳吉学長など本学関係者の他、滝口茂柴田町長、村上英人蔵王町長をはじめ、柴田郡柔道協会、仙台大学柔道塾関係者など約85名が参加し、南條教授の報告に耳を傾けました。

南條教授は報告の中で、2013年の全日本柔道女子監督に就任した当時の状況やその後の強化方針、リオ五輪での選手村の様子、女子70kg級で田知本遥選手（ALSOK所属）のセコンドに入りサポートした時の様子などを、時折裏話なども交えながら、約1

時間15分間お話し下さいました。

報告会の後には懇親会も開催され、参加者は南條教授のこれまでのご苦勞をねぎらわれていました。

なお、12月18日（日）には柴田町柔道協会主催による仙台大学柔道塾に通う子どもたち等を対象とした報告会も本学を会場に予定されています。

Study in Japan Fair 2016日本留学フェア 報告

平成28年10月15日（土）～16日（日）の2日間、日本留学を志すベトナムの学生が、適切な進学先を選択し、且つ実りある留学を達成できるようにするため、我が国の留学制度及び高等教育に関する情報を提供し、我が国への留学の促進を図ることを目的とした、独立行政法人日本学生支援機構主催の日本留学フェアがベトナムで開催されました。本学からは、朴澤理事長・学事顧問、関矢教授、事業戦略室西塚室長、鈴木美生職員、大学院事務室齋正展担当課長、運動栄養学科山田新助手、菊地新助手の7名が参加しました。

1日目、ハノイ市Lotte Hotel Hanoi会場において来場者数はおよそ1,509名、2日目のホーチミン市REX Hotel 会場では来場者数1,452名と多くの方が来場されました。また、国公立大学、私立大学、短期大学、専門学校、日本語学校、その他教育機関等の参加機関が各ブースを出展しました。出展内容としては大学案内、募集要項、シラバス等の資料展示及び配付、大学紹介ムービーの上映、教育内容、入学試験、奨学金、特色等に関する個別相談の実施をしました。仙台大学のブースには、高校生、大学生等留学希望者、高校の進路指導担当教員、大学等の国際交流担当者が訪れ、両日で約60名と例年以上に大盛況となりました。

さらに、今回は平成25年3月に仙台大学と国際交流協定結した、ハノイ大学とホーチミン市体育大学の学生に対して、大学紹介のプレゼンテーションを実施しました。

ベトナムの首都ハノイ市にあるハノイ大学は、外国語大学として発展してきた国立大学であり、日本語学部生約20名を対象に菊地新助手が発表を行いました。大学の基本理念であるSports for allのもと、アスリートとしてだけでなく、スポーツを楽しむや健康、観る・支えるといった観点で多様な視点からスポーツを探求できる各学科の特色を紹介しました。将来通訳を志望する学生など、スポーツと情報に関心を寄せる学生が多く見受けられました。

また、ベトナム最大の都市ホーチミン市にあるホーチミン市体育大学は、本学と同様に体育科学を専門とする大学であり、聴講者3名に対して山田新助手が発表をしました。2020年に行われる東京オリンピックに向けたベトナムスポーツ界の展望と、仙台大学で学ぶことができるコーチングスキルやスポーツ栄養、マネジメントスキルなどの普及を呼び掛けました。

国境を越えて大学を紹介するにあたり、スポーツをすべての人に、という基本理念を改めて実感することができました。今後は仙台大学全体の取り組みや自分たちの専門分野を活かし、スポーツ界の発展のためにできることを考えながら尽力してまいりたいと思います。

【報告：新助手 菊地 遥】



会場内に設置された本学のブース



FISU世界大学フロアボール選手権大会2016

～ 本学フロアボール部から 日本代表として2名の学生が出場 ～



阿部学長に世界選手権での活躍を報告する中川さん（右）と郡司さん（左）

2016年7月19日～24日の6日間にわたり、ポルトガル・ポルト市で開催の「FISU世界大学フロアボール選手権大会2016」に本学フロアボール部のFW中川卓己選手（現代武道学科3年／フロアボール部キャプテン）と、FW郡司達哉選手（体育学科3年）の2名が日本代表選手団に派遣され出場しました。世界大学フロアボール選手権大会は2年に1度開催されており、参加国は日本、韓国、フィンランド、スウェーデン、スイス等16か国、各国の大学生の代表チームによる熱戦が繰り広げられました。結果は男女ともにフィンランドが1位、スウェーデンが2位と北欧のチームが上位を独占し、2名が出場した日本（男子）チームは8位の結果となりました。出場した中川さん、郡司さんの2名はそれぞれの試合のなかで最も活躍した選手に与えられる

称号「ベスト選手賞」に選出され、帰国後には阿部学長へ出場報告を行いました。

阿部学長からは「フロアボール日本代表としての経験を後輩に伝え、未開発な部分などは研究し今後のチームの発展に貢献できるよう益々の活躍を期待します」と労いの言葉がかけられました。

フロアボール2016全日本学生選手権代表 FW中川 卓己さん（現代武道学科3年）

「海外での試合はとても良い経験になりました。全日本チームはカウンターメインの戦略で試合を運びましたが、海外の強豪チームは戦術を練りフォーメーションで相手を崩す盤石なゲーム展開で点数を重ね、層の厚い攻撃に日本とのレベルの差を痛感しました。帰国後は郡司君と二人で戦術を考えるゲーム展開をしようとチームに持ち帰り実践しているところです。今後はキャプテンとしても、仙台大学のチームの武器を活かし相手のペースに流されない戦術をもった戦い方をしていきます。」

FW 郡司 達哉さん（体育学科3年）

「社会人・学生のトップに属する関東のA代表とチームメイトと共に戦ったことも良い経験でした。ミーティングから得られる気づきも多く、海外からの学びを得て着実に以前とは一味違った試合ができるよう今後につなげていきたいです。」と話してくれました。

フロアボールとは

スティックを使って穴の開いたプラスチックのボールを相手チームのゴールに入れ得点を競う6人制団体競技。コートは40m×20m、周囲を高さ50cmの板で囲む。1ピリオド20分で第3ピリオドまで競う。アイスホッケーのように選手交代は自由で1チーム最大20名で構成される。フィンランド発祥のフロアボールは用具も比較的安価に揃えられることや体育館でできるニュースポーツとして幅広い年齢でも楽しめる。

硬式野球部が仙台六大学野球秋季リーグ戦で優勝

このほど行われました仙台六大学野球平成28年度秋季リーグ戦において硬式野球部が3季ぶり5度目の優勝を果たしました。

今回のリーグ戦では、松本桃太郎内野手（体育学科4年 - 北海高校出身）がリーグ通算最多安打記録を25年ぶりに更新し、120本安打を達成。また、リーグ最多本塁打記録も更新し、他にも最優秀選手賞、最高打率賞、最多本塁打賞をも賞し計5個のタイトルを獲得しました。

なお、最優秀選手賞には稲毛田渉投手（体育学科1年 - 帝京高校出身）が、ベストナインには松本桃太郎内野手、岩佐政也投手（体育学科3年 - 柴田高校出身）、望月隆晟内野手（体育学科2年 - 東海大学浦安高校出身）、白川拓海外野手（体育学科3年 - 霞ヶ浦高校出身）が選出されました。

硬式野球部は初の明治神宮大会出場をかけた東北地区代表選に出場しましたが、富士大学に惜しくも敗れ、明治神宮大会初出場はかないませんでした。なお、東北地区代表選では稲毛田渉投手が敢闘賞を受賞しました。



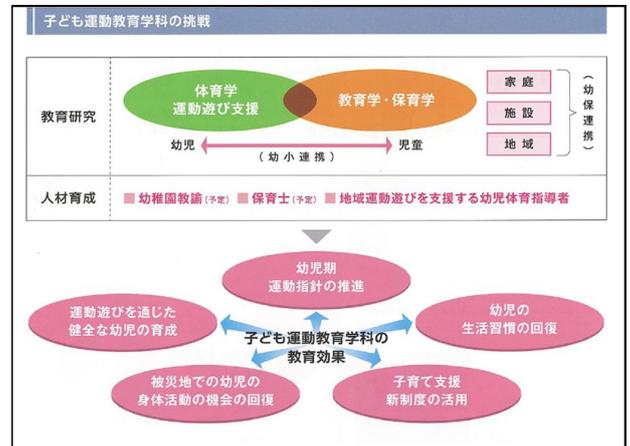
2017年4月「子ども運動教育学科」が誕生

2017年4月に本学体育学部に6番目の学科として「子ども運動教育学科」が誕生します。

新設される子ども運動教育学科は「幼児体育」「幼児教育」「保育」の3つを大きなコンセプトに据え、単に幼稚園教諭や保育士などを養成するだけではなく、体育科学を専門とする大学として、幼児期における子供の発達や発育を支えるための運動を指導できる、新たな人材育成を目指します。2011年3月11日に発生した東日本大震災以降、被災地の子どもたちの体力低下が指摘されています。また、小学校に入学したばかりの1年生が、集団行動がとれない、授業中に座ってられない、先生の話を受けない等、学校生活になじめない状態が続く、いわゆる「小1プロブレム」についても近年問題となっています。子どもの成長には、幼稚園期とか、小学校期とか、という不連続な時間はありません。日々、連続して発育・発達していくのです。

本学では、この視点から、これら諸問題を解決するためには、就学前から子供たちが運動に親しむ習慣を身に付けることが重要と考え、就学前の遊びの運動から小学校入学後の体育スポーツに自然に移行できるような運動指導ができる人材や、幼小連携などの諸課題にも取り組めるような人材の育成に力を入れていきます。

子ども運動教育学科の定員は40名で、11月より各選考区分での入学試験が行われます。入学試験などに関する問い合わせは入試創職室（0224-55-1017）までご連絡ください。



大学院前期入学試験願書の受付開始

10月31日（月）より大学院前期入試の願書受付が開始となりました。

大学院活性化の為にも、学部からの入学生を多数期待しております。ぜひ、先生方からも研究室や部活において学部生に周知していただきたいと思っております。

前期入試における願書受付期間は以下のとおりとなっております。

- ・願書受付期間 10月31日（月）～11月11日（金）
- ・お問合せ先 大学院事務室 0224-55-5706



仙台駅2階看板がリニューアルされました

10月11日より仙台駅2階にある本学のPR看板がリニューアルされました。

今回の広告看板は、「子ども運動教育学科新設」「2017年創立50周年」「国際交流」の3つをテーマに作成しました。

なお、今回の掲出から従来の特殊フィルムによる掲出からデジタルサイネージによる掲出へと変わり、今まで以上に鮮明でより目立つ広告へと生まれ変わりました。

なお、掲出方法の変更に伴い、フィルム作成の手間が省けた分、広告掲出費用が従来より安価に抑えられています。

掲出期間は10月11日～来年3月31日までの半年間です。仙台駅をご利用の際には是非ご覧ください。



リニューアルされた3種類の広告看板